

I 長野県学校体育研究会の研究の方向

1 共通理念

生涯にわたって運動に親しみ、健康で豊かなスポーツライフを構築していける人間の育成

2 研究テーマ

すべての子どもたちが、自ら運動の楽しさを味わい深めていくにはどうしたらよいか

3 研究の重点

「日々の授業の充実 ～すべての子どもが夢中になる運動と授業の工夫」

II 北安大会研究テーマ

仲間と創りながら、自ら運動を実践していく力を育てる体育学習のあり方
～子どもにも教師にも「わかりやすい体育」、対話の質を高める体育授業～

III テーマ設定の理由

これまで北安支部では、「運動に魅力を感じ、自ら運動を実践していく力を育てていく体育学習のあり方」をテーマに、下述に示す【運動の楽しさを深めていく3視点】を大切に、研究を深めてきた。

【運動の楽しさを深めていく3視点】

○運動素材の教材化

⇒子どもが運動に魅力を感じ夢中になって活動できる教材の開発

○めあてがきちんとすわる学習

⇒願いを持ち、動きの高まりを感じながらできる単元構成

○支え合いのできる人間関係

⇒仲間と関わる楽しさが味わえる学習場面

3視点を具現化するため、子どもが夢中になれるような教材を作るために研究会員で集まって教材開発（フラッグフットボール、ネット型の運動や運動遊び、バドミントン等）を進めたり、めあてがきちんとすわるには、子どもたちに運動のイメージを明確に持たせることが重要だと考え、ボール運動や器械運動においては、会員で作成した動画を単元の最初に子どもたちに見せたりもした。また、子どもたち同士がどのように関わったら運動の楽しさを深めていくことができるかも模索してきた。

現行の学習指導要領では、児童・生徒の人間としての調和の取れた育成を目指し、豊かな創造性を備え、持続可能な社会の創りて手となれるようにし、すべての教材化において3つの資質・能力「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力、人間性等」を求めている。

これまでに大北支部で大切にしてきた【運動の楽しさを深めていく3視点】を現行の学習指導要領に沿って見直してきているが、改善できていることや更に改善すべき点を言語化して整理すると以下ようになる。

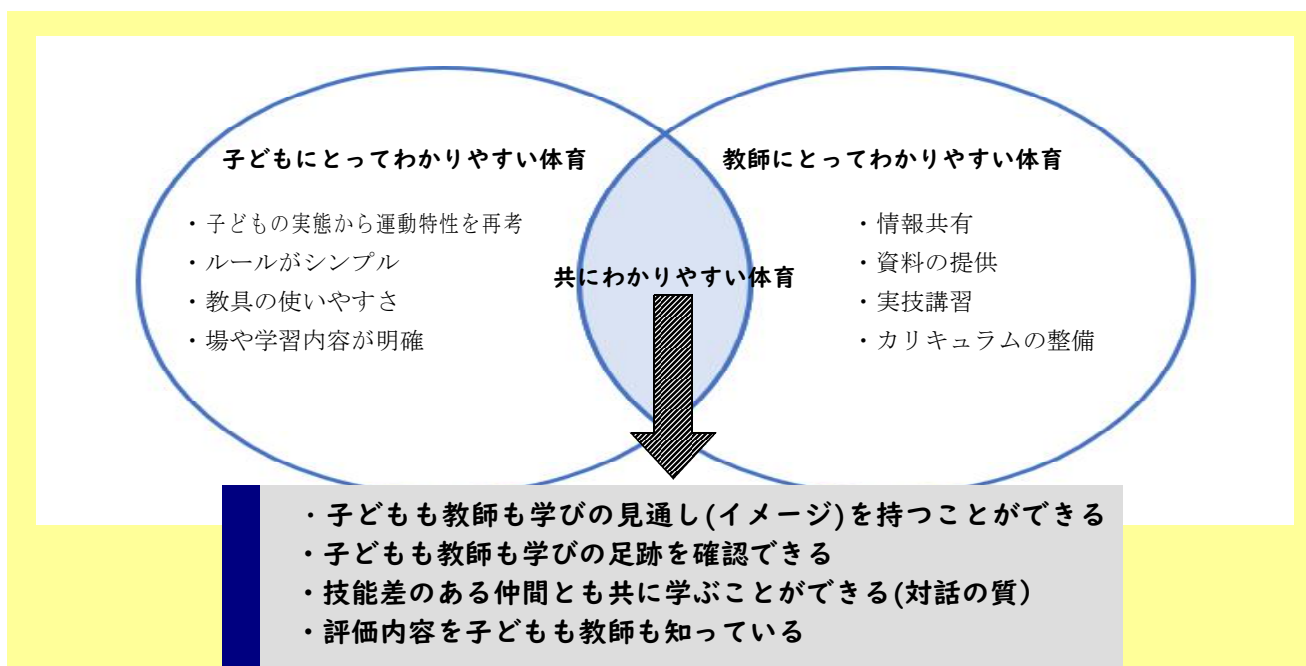
①「運動素材の教材化」「めあてがきちんとすわる学習」は、『子どもにも教師にも「わかりやすい体育」』を目的とし、中学校では子どもに向けた教材化、小学校においては子どもだけでなく、体育が専門でない先生方にもわかりやすい教材や指導案の作成を目指す。

②「支え合いのできる人間関係」は、『対話の質を高める体育授業』とし、「問い」から始まる授業づくりを大切に、対話を用いて課題追求することで子どもたちが思考力・判断力・表現力を高め、更に知識や技能を定着させてい体育く授業を模索する。

このような実践を通して、自ら運動をしていく力を獲得していくことで、生涯にわたってスポーツを親しみ、健康で豊かなスポーツライフを構築できる子どもに育つことねがい願ひ、本テーマを設定した。

IV 研究の内容

1 子どもにも教師にも「わかりやすい体育」とは？



子どもにも教師にも「わかりやすい体育」とは、子どもの立場から考える体育、教師の立場から考える体育、そして、共通して考えられる体育の3つに分けて考えることができる。

本研究では、概ね、子どもにとっても教師にとっても「わかりやすい体育」とはどうあるべきか明らかにしていくが、小学校においては、体育科がマネジメントして他の先生方に体育授業を進めてもらわなければ、質の高い体育授業を子どもに対して提供できないと考えるため、「教師にとってわかりやすい体育」についても明らかにしたい。

2 対話の質を高めるとは？

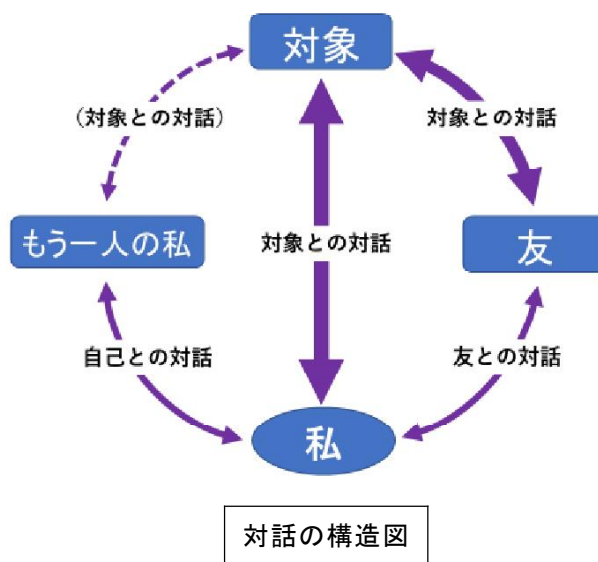
「主体的・対話的で深い学び」において、「主体的」「対話的」「深い学び」は、一体的なものであると考える。そのように捉えたとき、対話的な学びはふたつの意味で必要だと考える。一つは、対話的な学びが行われることで主体的な学びに向かう姿が生まれることである。もう一つは、一人では生み出せなかった知恵が生まれたり、新たな知が創造されたりする良さがあがるからである。

体育学習においても、アドバイスやコツの共有、ルールの理解、戦術の練り上げ、役割の確認等、対話的な学びが深い学びを創り出すカギとなる。そこで、本研究では、対話の構造を明らかにし、児童生徒にどのような指導をしていけば対話の質を高めることができるか明らかにしたい。

対話の質を高めることをねらう本研究を進めるにあたり、対話の構造を明らかにする必要があると考えた。そこで、対話の内容を「対象との対話」「友との対話」「自己との対話」でとらえ、構造化した。

<対象との対話>

学びの中で児童・生徒は、既存の知識・技能や体験をもとに学習材となる対象と自己内で対話を行う。そして学習問題に出会うと問題の意味を考えながら、解決策を模索・検討する。そのとき学習問題が「本質的な問い※」であると児童・生徒は対



象とより深く対話することができるようになる。児童・生徒が対象との対話を深めることにより、友との対話、自己との対話も深まっていくと考える。

※本質的な問い：一つの明確な答えがあるわけではなく、単元において何度も問い直され、その答えが更新され続けるような問い。

<友との対話>

児童・生徒は、友との対話によって自分の考えと友との考えのちがいを比較しながら思考を深める。友との対話を成立させるためには、「わからないということ」「友達の声に耳を傾けること」が重要となる。友との対話のあり方を指導することによりコミュニケーション力を高めることになり、友との対話を充実させることになる。

<自己との対話>

児童・生徒一人ひとりが問いを追究していく過程で重要となるのが、自己との対話である。児童・生徒は、本質的な問いとなる学習問題の解決を目指して追究していく中、「これでいいのかな」と自分に問いかけながらより深く考え、自分の進むべき方向を決定していく。また、友との対話を終えた段階においても自己との対話は深くなると考える。友との対話によって対象と出合ったときに捉えることのできなかった新しい考えに触れることになり、自己との対話を深化させ、自分の見方・考えを吟味し、より確かなものへと再構築していく。そして納得解・最適解が導き出されていく。

これらの対話は、学習問題や単元等によって大きく変わっていき、常に最もふさわしい支援をしていくことが重要となってくる。教師は、児童・生徒の対話活動を「聴く」姿勢でとらえ、「つなぐ・もどす」という支援を工夫していくことが重要になる。具体的には、個と個、グループとグループ、個と資料等をつなぐ支援、個、グループ、全体、学習問題等にもどす支援を学びの状況をとらえて判断し支援していく。

V テーマに迫るための重点

子どもにも教師にも「わかりやすい体育」、対話の質を高める体育授業に迫るために、以下の4点を研究の重点として進めていくこととする。

- 1 子どもにも教師にも、わかりやすい教材・教具づくりの工夫
- 2 子どもにも教師にも、学びの見通し(イメージ)や足跡を可視化するための工夫
- 3 技能差のある仲間とでも深い学びを実現するための対話の工夫
- 4 ルーブリック評価での資質・能力の評価づくり

I 子どもにも教師にも、わかりやすい教材・教具づくりの工夫

「発達適合的再現」と「誇張」を主要な視点として以下の点で見直していくこととする。

(1) 運動特性の再考 ～子どもの実態を捉えた上で運動特性を見直す～

- ・ 先行体験を活かした運動づくり
- ・ 子どもが魅力を感じる運動づくり
- ・ すべての子どもたちが運動の楽しさを味わえる運動づくり

(2) 学習環境の工夫 ～子どもの身体的・技能的レベルに合わせて学習環境を工夫する～

- ・ 教材や教具の工夫
子どもの実態や学習のねらいに応じた教材・教具づくりの工夫
- ・ 場づくり
プレイヤーの人数やコート、用具などを工夫し、複雑なゲームの状況判断の対象を焦点化し、その選択しを軽減させるための場づくり
- ・ 学びの場を活かせるような学習内容の配置と単元展開

2 子どもにも教師にも、学びの見通し(イメージ)や足跡を可視化するための工夫

(1) イメージビデオやイメージボードの利用

目指す姿を教師と教師、子どもと子ども、教師と子どもの間で共有することで学びの見通しが持て、対話の質も高まると考え、以下の手立てを工夫する。

- ・ねらう動き、ねらうゲームの様相を撮影した動画
- ・動きのコツを共有するためのイメージボードの作成・更新（掲示物）

(2) 単元を貫く問いに迫ることができる学習カードの作成

学習カード活用の本質は、それを見て振り返ったときに、その単元で変化した自分を感じ取ることができることであると捉える。子どもが学習前・中・後の履歴を残していき、その全体を子ども自身が自己評価できるものが良いと考えた。

- ・ワンページポートフォリオシート（OPP シート）の活用
- ・単元の核心※や単元を貫く問いの明記

※単元の核心：知識や技能ではなく、その単元で子どもに養いたい中心概念

(3) カリキュラムに基づいた体育科通信の発行や校内実技講習会の実施

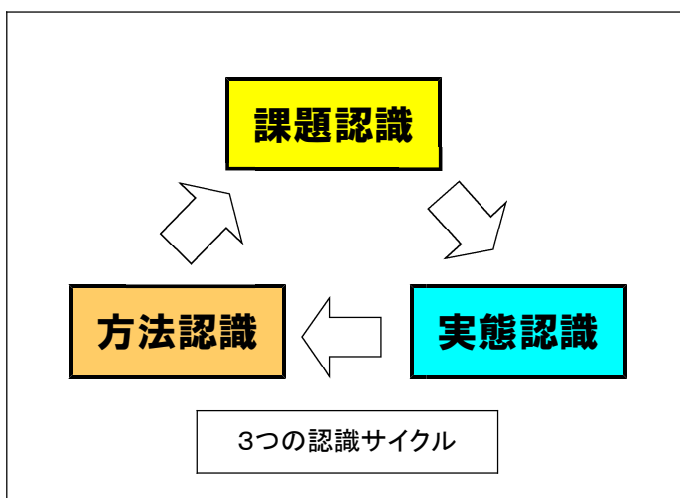
教育目標具現に向けたカリキュラム・マネジメントの視点から考えたとき、その学校における体育科並びに保健体育科という教科の役割を明確にし、先生方へのアプローチを工夫する。

- ・体育科通信の発行（月 1 回の発行）
- ・校内実技研修の実施（模擬授業の実施、単元の核となる動きの確認等）

3 技能差のある仲間とでも深い学びを実現するための対話の工夫

(1) 深い学びを実現する対話のサイクル

体育の授業において、深い学びを実現するためには、学びの密度（のめり込む、夢中になる）と学びの深さ（理解、納得、表現）を高めることが重要であると考えた。そのためには、教師からの深める問いかけはもちろん重要であるが、学びが児童生徒のものとなり、児童生徒同士で、「なんで？」「どうして？」「本当に？」「どんな感じ？」と問い合える力を付ける指導が必要となる。そこで、「課題認識」「実態認識」「方法認識」の三つの認識を児童生徒と共有し、授業の中で意識しながら使わせることで、深い学びを実現したいと考えた。



(2) 3つの認識と具体的行動

認識	内容	表出させたい言葉	手立て
課題認識	運動をイメージし、その課題がわかること	「どうなりたい？」等 ・めざす動きについての言葉	・イメージビデオ ・図解(イラスト・写真)
実態認識	自己やチームの様子、問題点がわかること	「自分(たち)こうなっているよ」等 ・動きを客観的に分析している言葉	・動画でメタ認知 ・見本との比較 ・ゲーム分析
方法認識	課題を解決するための方法がわかること	「じゃあ、こうしよう！」等 ・課題解決の方法についての具体的な言葉	・練習方法の選択 ・友や他グループからの学び

4 ルーブリック評価での資質・能力の評価づくり

知識・技能は比較的簡単に評価することができる。しかし、「学びの過程で身につく学力」つまり気づいたことや考えたこと、養われた思考力・判断力・表現力などは把握しづらく、簡単には評価することは難しい。それゆえに、そうした「学びの過程で身につく学力」の部分は、評価の面で課題となってきた。しかし、現行の学習指導要領では思考力・判断力・表現力が重視されている。また、学習評価は結果が生徒に還元されてはじめて機能し、教育的価値をもつ。つまり、評価は「評価したら終わり」「評価のための評価」ではなく、生徒の資質・能力の向上とそれに向けた指導改善に結び付けるために行うものとする。学習評価を考えることは、生徒にどのような資質・能力を育成するかを考えることにつながる。

そこで本研究では、思考力・判断力・表現力の高まりを判断する評価方法について、「ルーブリック評価※」試行する。ルーブリックは見える評価で見えない力を測ることが可能となる。期待されるルーブリック評価の効果としては、Bが達成された児童・生徒は、次に自分がどのような姿をめざせばよいかAを読めばわかる。また、児童・生徒と教師が目標を共有することにより、生徒と教師の協働作業で生徒の思考力・判断力・表現力の状況の評価することができる。

※ルーブリック評価：表を用いて学習の達成度を測定する評価方法

バドミントン ルーブリック			
大町中学校保健体育科			
単元の核心：相手を崩すストローク※ ※打ち方・フライングの総称			
<知識・技能>			
評価	A	B	C
個人	・B基準を満たした上で、試合がつけられる。 ・スマッシュ、ドロップ、ヘアピンショットのポイントを理解し、技能が身に付いている	・半身でストロークが打てる。 ・バッククリア、サービスのポイントを理解し、技能が身に付いている	・B基準を満たしていない ・半身にならず手だけで打つ ・ストロークに変化がなく、打ち返すだけのショット
試合	・B基準を満たし、ストロークを組み合わせ、相手を崩すラリーができる	・相手の前の方について理解し、自分のプレースタイルで相手を前後に動かすラリーができる	・B基準を満たしていない ・ラリーが続かない
<思考力・判断力・表現力>			
評価	A	B	C
学習カード	・B基準を満たしている ・発見した課題とその解決方法が表現されている	・単元の核心に向かった記述内容である	・B基準を満たしていない
活動中	・B基準を満たしている ・チームの中で、賢い対話法をリードしようとしている（提案がある）	・練習やゲームから、自分の課題をとらえ、練習メニューを選択している ・新しい課題を設定している ・賢い対話法を実践しようとしている	・B基準を満たしていない
<主体的に学習に取り組む態度>			
評価	A	B	C
個人	・B基準を満たしている ・課題の解決方法を追究しようとしている	・自分からすすんで粘り強く取り組もうとしている ・具体的なめあてを設定し、課題解決に向かって取り組もうとしている	・B基準を満たしていない
チーム	・B基準を満たしている ・自分から、チームの安全員とつながり、課題の解決方法を吟味・検討しようとしている	・動きのポイントや戦術について賢い対話法を繰り返して粘り強く取り組もうとしている	・B基準を満たしていない

大町中学校 バドミントン

ネット型ゲーム ルーブリック

白馬北小学校 4年生

単元の最後にみんながなっていて欲しい姿です。目標にして学習に取り組みましょう。

【知識・技能】

見るポイント⇒ドリルやゲームの様子

項目	◎	○	△
ボール操作	レシーブのポイントが理解し、ねらったところにボールを返球することができる。	レシーブのポイントを理解し、ボールを味方へ返球している。	レシーブのポイントが理解できておらず、ボールを操作できる位置に移動していない。
	セットのポイントが理解し、アタッカーに合わせたセットをすることができる。	セットのポイントを理解し、打ちやすい高さにセットしている。	セットのポイントが理解できておらず、ボールを操作できる位置に移動していない。
	アタックのポイントが理解し、相手のコートにのわらったところに返球している。	アタックのポイントを理解し、相手のコートへ返球している。	アタックのポイントを理解できておらず、ボールを操作できる位置に移動していない。
ボールを持っていない時の動き	自分の役割を理解して、役割が変わっても、ボールを操作できる位置に移動している。	自分の役割を理解して、ボールを操作できる位置に移動している。	自分の役割が分からず、ボールを操作できる位置に移動していない。

【思考力・判断力・表現力】

見るポイント⇒話し合いの様子・ドリルやゲームの様子・学習カードの内容

項目	◎	○	△
課題を見つける 作戦を考える 練習方法の選ぶ	自分たちの良いところや課題を考え、課題に応じた練習方法や作戦を考えたり、選んだりして、仲間に伝えている。	自分たちのチームの良いところや課題を考え、課題に応じた練習方法や作戦を選んでいく。	自分たちのチームの良いところや課題を考えたてていない。
動きを考え 友達に伝える	チームでボールをつないでアタックするために必要な動きを考え、チームのみんなに伝えている。	チームでボールをつないでアタックするために必要な動きを考え、友達に伝えている。	チームでボールをつないでアタックするために必要な動きを考えていない。

【主体的に学習に向かう態度】

見るポイント⇒準備や片付けの様子・話し合いの様子・ドリルやゲームの様子・学習カード

項目	目標とする姿
運動への取り組み	キャッチセットアタックブレールボールに進んで取り組んでいる。
友達との関わり	誰とでも仲よく関わりながら運動に取り組み、友達の考えを認めたり、取り入れようとしている。
勝敗の受け入れ	勝敗を受け入れ、仲間に応援や励ましの声掛けをしたり、相手チームを称賛したりしている。

全てできている…◎ ・ 1つ以上できている…○ ・ 1つもできていない…△

白馬北小学校 ネット型